

序

本書は一学徒たる筆者と志を同じくする諸学徒のための書である。筆者は憚りながら教師を名乗るのを許される年齢に達した頃に根本的な進路変更を余儀なくされた。筆者はエトムント・フッサールの薫陶を受け、現象学的方法に基づき、一連の論文を執筆した。フッサール編「研究年報」所載の上記の諸論考によって筆者の名は世に知られるところとなったが、当時、筆者はすでに哲学研究を中止しており、公的な活動は筆者の念頭にはなかった。筆者はキリストと「教会」への道を見出し、実践的な成果の取得に努めた。シュパイヤーのドミニコ修道女会経営の女子師範学校の教師となった筆者が現実のカトリック界に馴致されるのは当然の成り行きであった。同時に同世界の思想的基盤を知得せんとする願望が速やかに自覚されたのも当然の成り行きであった。最初に聖トマス・アクィナスの諸著を繙いたのも理の当然と言うべきであった。かくて『真理論』(Quaestiones disputatae de veritate)を独訳し、哲学研究へと復帰する道筋が立ったのであった。

聖トマスは恭順かつ従順なる弟子を得た。が、弟子の知性は白紙^{ミヤカシ}ではなかった。消し^よ様のない極めて瞭然たる刻印をすでに打たれていたのであった。合流した両哲学世界は対決を余儀なくされた。必要に迫られて書かれた最初の論考が「フッサール記念論文集」所載の小論「フッサールの現象学と聖トマス・アクィナスの哲学」であったが、時

を同じくして筆者は『真理論』の訳稿と格闘していた。訳了し、原稿が印刷に付された時、改めて両世界の討論が企図されたが、討論の基盤は以前よりも広がり、客観性を増していた。一九三一年、浩瀚な草稿が成った。眼目は「現実態」と「可能態」の概念の論究にあつた。標題も「現実態と可能態」となるはずであつた。当初よりすでに全面改稿の必要が痛感されていたが、別種の用務のために見合わせざるを得なかつた。

跣足カルメル修道女会への入会を許可され、修練期を終えた後、昨年（一九三五）、筆者は旧草稿を印刷に付すべく整理せよとの長上方の指示を受けた。旧稿は全面的に改訂された。活かされたのはごく一部（第一部の冒頭部分）に止まる。残存するのはトマスの「現実態—可能態」論の出だしである。が、飽くまでも出だしのみに止まる。中核に据わるのは存在論である。トマス思想と現象学的思考との対比は、存在論に関する実質的な論述に付帯する。一方で存在の意味を探索し、他方で中世思想と最新思想との融合を図るのは筆者一己の関心事であるのみならず、哲学者の生き方を支配しかつ大方の者に内的必要性を痛感せしめる事案である。筆者の試みには至らぬ点が多々あるとはいえ、裨益するところもあろうかと考える所以である。至らぬ点については十分に自覚している。筆者はスコラ哲学の新参者であり、知識の不足は徐々に個別的に修得せんと努める他はない。因つて論題の歴史的展望などは思いも寄らぬことであつた。既存の解答を継承すれば、先ずは実質的な論究の端緒は開かれよう。更なる実質的な明知への道も開かれよう。由来、人間の思考回路は徒手空拳で済まされるほどの完成度に達してはいない。が、そればかりではない。既存の解答を継承するのは過去の思想家等の脈動に触れる方法であるのみならず、同方法は、およそ真摯な真理探究者に共通するところは時代を越え民族と学派の壁を越えるとの認識に至る道でもある。筆者の試みも、かかる哲学的かつ神学的な生ける思考への活路を開くのに幾分なりとも寄与するところがあれば、徒勞ではなかつたのである。

イエズス会士エーリヒ・プシュヴァラ神父の『存在者の類比』(Analogia entis)と拙著との関係について問う向きも多かる。同一論題に関する論述が散見するのは確かであり、プシュヴァラ神父も同著の序文で、トマスとフッサールとを対比した筆者の最初の論考が同神父にとつて有意義であつたと述べていた。拙著の初稿と『存在者の類比』の決定稿は同じ頃に成立したが、筆者は同著の初期草稿の閲覧を許可され、一九二五—一九三一年頃を中心に活潑な

意見交換を行った。両者は各々問題提起に関してそこから決定的な影響を受けた。(のみならず意見交換は筆者にとつて哲学研究を再開するための強い刺戟となった)。具体的に言えば、『存在者の類比』第一卷(既刊)は本書で着手された論究のための体系的・批判的な予備的考察であり、E・プシュヴァアラ神父は同著第二卷で同問題(意識・存在・世界)を論じる予定を立てていた。が、論述に重なる部分があるのも確かである。何故か。類比は全存在者を支配する基本法則として提示されるが故に論法の決定的要因でもあるに相違ないからである。が、他方、存在者に関する客観的研究は存在の意味に基づき同基本法則の発見へと論者を導くからである。本書で実践される探求は問題提起の包括性の点で『存在者の類比』第一卷には及ばない。意識は存在者に至る通路にして特種の存在であると見做されるが、意識と客観世界との相互関係性に関する根本的な論究は本書にはない。客観世界の構造に対応する意識構造に関する論究もまた然り。知解性もまた専ら特種の存在者として導入され、存在者とその概念的把握との相互関係性に関する考察もまたその場限りのものであるが、元々包括的に論ずべき基本的題目ではない。論題を意識的に限定したからである。哲学体系ならぬ存在論の概略を示すのが本書の眼目である。存在論が存在論として単独に考察されたこと、事実は無論「意識を構成する諸形態」論と存在論との関係の把握を前提とし、加えて完成された認識論・科学論のみ十全に基礎を置く論理学と存在論との関係の把握を前提とする。

本書において実践される論法と『存在者の類比』第一卷で必要と判断された論法とを比較すれば、前者において、「内歴史的」(inengeschichtlich)思考が、「超歴史的真理」を求める努力に対して一籌を輸する(6)のは確かである。が、筆者の採った方法を正当化するのは他ならぬE・プシュヴァアラ神父の所謂「被造物的思考」である。科学的方法もまた十人十色である。各論者が己れの限られた天稟に従って挙げる業績を付き合せて相互に補完すれば「超歴史的真理」までの距離も縮まるのである。各人の能力に偏りがあるのは当然である。一方、哲学者は「問題」に接近するに既定の概念的把握を以てする。歴史的脈絡を「理解」し発見するのが同哲学者の強みである。他方、哲学者は独自の認識方法を用いて直に問題を探求し、専ら自力で収める成果に基づいて他者の知的業績を理解する。前者は(大学)者であれ慎ましい職人的学者であれ)精神史家が拳(7)って探求する「前史」を前提とする。天性の現象学者はすべて第二の部類に入る。『存在者の類比』第一卷は特定の諸問題に関してすでに本書を補完する役を果たしたが、同第二卷

が公刊されれば、本書の所論も同書の広範な「内歴史性」によって実質的に補完されるはずである。

E・プシユヴァラ神父と筆者は創造主と被造物との関係の解釈に関して基本的に一致している。哲学と神学との関係の解釈に関しても同様である。但し、後者の解釈に関しては後に若干の補足的考察を提示する。⁽⁸⁾ また両名はアリストテレスとプラトンに対する見解を同じくする。「あれか、これか」の立場を認めず、双方を正当化する解答を探求する。聖アウグスティヌスと聖トマスに關しても同様である。

本書の少なからぬ結論を見て疑問を呈する向きもあろう。著者がプラトン、アウグスティヌス、ドゥンス・スコトゥスの後に続かずして、アリストテレスとトマスの列に加わったのはなぜか、と。答えは簡単である。筆者は他ならぬトマスとアリストテレスを出発点としたからである。筆者の具体的な探求も一定の目標に達したが、別の観点に立つならば、仕事は更に速く更に容易であったのかもしれない。とはいえ、それは己れの辿った道を後日否定するための理由にはならない。筆者が己れの方法故に超克を迫られた障碍や困難にも他者を利用する可能性があろう。

最後に、現代の形而上学の基盤形成に資する最重要な試みと本書との関連性に関して更に一言する必要がある。一方は、マルティン・ハイデガーの「実存哲学」である。他方は、ヘルトヴィヒ・コンラート・マルティウスの諸著が提示する「存在論」である。一方は他方の対極に位置する。筆者がフライブルク大学でフッサールの助手を務めていた時分（一九一六—一九一八）、ハイデガーは現象学に接近した。それが機縁で面識を得た両者の間に、具体的な接触がはじまった。が、両者は生活空間を異にし、進路を違え、ために交流もやがて中断した。筆者は、ハイデガーの『存在と時間』を出版直後に読んだ。同書は筆者に強烈な印象を与えたが、当時は実質的な議論を戦わずに至らなかった。

ハイデガーの大著を初めて耽読してから久しくなるが、本書の執筆中、当時の記憶が凶らずも蘇った。が、存在の意味の把握に関して、双方の隔たりは甚だしく、ために筆者は本書の脱稿後、改めて両者を対比する必要に迫られたのである。ハイデガーの実存哲学に関して補説を付した所以である。

今は昔、筆者はヘルトヴィヒ・コンラート・マルティウスの傍らで生活する機会を得た。両者にとって決定的な時期であった。筆者はそこから己れの進路を決定するような刺戟を受けた。本書にはヘルトヴィヒ・コンラート・マル

テイウスの諸著の影響が散見するはずである。

本書の完成に寄与された各位に衷心より謝意を表す。

一九三六年九月一日、ケルン、リンデンタールにて

著者識